

ムラート・アウエーゾフ カザフ人、カザフスタン共和国国立図書館館長。1942 年生まれ。

カザフスタンの生んだ大作家、ムフタル・アウエーゾフ(1897-1961)の子息、モスクワ大学外国語学部中国語科に学び、中国哲学・文化・芸術に深い造詣を持つ。エッセイストとして知られる一方、詩人オルジャス・スレイメノフと共に 1980 年代以降のカザフスタンの民主改革の先頭を立った知識人の一人であり、独立後のカザフスタン国会議員および初代駐中国大使をつとめた。2004 年 5 月のチェチェン・インゲシ人の強制移住 60 周年記念国際会議にあたって国立図書館講堂を提供し、併せてコーカサス・チェチェン関連書籍展を開催した。収録は 2004 年 6 月 3 日、国立図書館館長室で。

聞き手：姜 信子/岡田 一男

自分自身とカザフスタンについて

私は、ムラート・アウエーゾフ、62 歳です。私はモスクワ大学外国語学部で中国語を 6 年間学びました。その中国語の知識を生かして中国の歴史や文化を研究してきました。この経験は、カザフスタンが新興独立国家となって、中国に大使館を開設するのに大いに役立ち、初代の駐中国大使に任命されました。私は歴史や哲学、芸術に興味を持っており、それに関連したエッセイを執筆しております。私はまた、カザフスタンの独立に当って創られた最初の国会の国会議員を務めました。そこで CIS 国会間連絡調整委員会委員長に選ばれました。中国大使の任期を全うした後、国の遭遇している困難の中で、私は、「アザマート」と呼ばれる野党勢力の創設に参加することになり、推されてその指導者となりました。その政党の意図は、対立を求めるのではなく、新しい独立国家の運営により建設的な提案を模索しようと言うものでした。

この若い新興独立国家については、内政面だけでなく、外交面でも複雑な問題を抱えています。地政学的な側面から見ても、わが国と長い国境を接するロシアと中国はもとより、アメリカもカザフスタンと中央アジアに並々ならぬ関心を抱いています。そしてこれらの国の求めるものは、わが国の目指すところとは一致していません。その複雑な国際環境は、内政にも反映されてくるのです。私は中国問題の専門家として中国の政策を注視していますが、中国の対カザフスタン政策は、自国の利害に密接に絡んでおり、それは我が国の利益とは必ずしも一致するものではありません。アメリカは、強国で経済的にも恵まれているのですが、この地域でやっていることは、きわめて二面的です。ともすればその政策はこの地域の諸民族の団結を阻害したり消滅させかねないものが含まれています。

またロシアとの関係は特別な意味を持っております。独立達成までカザフスタンはロシア帝国及びその後継者で

あるソ連の一部とされてきましたが、ソ連支配は二つの否定的なイデオロギーによって特徴付けられます。一つは植民地主義、もう一つは全体主義です。カザフスタンの歴史は、これら二つの政策の犠牲になってきた歴史です。1949年以來、40年間にわたりカザフスタンはソ連の核兵器実験場にされました。当初の20数年間は地上の、その後は地下核実験が続けられました。そればかりではありません。カザフスタンはソ連の全ての大量破壊兵器の実験場にされたのです。さまざまな化学兵器の、そして細菌兵器の実験すらもアラル海の小島ロジジェストヴェンヌイ（再生＝リバーズ）島では行われてきました。

### ソビエト時代 民衆の受けた試練

これはソ連全般とも言えるのですが、1930年代初めに農業の集団化が強行されました。その中でカザフスタンでは、戦争でもない平時にカザフ人の全人口の1/3が失われるという大飢餓が引き起こされました。困難を逃れるため、多くのカザフ人が、中国、イラン、ロシアなど周辺国に逃亡したり、移住したりせざるを得ませんでした。また10月社会主義革命(ロシア大革命)以来、幾度と無くカザフ人に対する粛清の嵐が吹き荒れました。特に1937-38年の大粛清では、非常に多くの高等教育を受けた民族文化の代表者である知識人たちが犠牲となりました。そしていわゆる社会主義計画経済の眼に見える結果として、我われはアラル海の滅亡を見ることになりました。第二次世界大戦の1941年から45年の間にカザフ人は45万人が兵役に動員され、うち30万人が戦死しました。カザフスタンはソ連全域の人々の流刑地となりました。政治犯だけでなく、富農のように社会的な出身だけで弾圧された人々も含まれます。また彼らを収容するための強制収容所が、1936年ごろからカザフスタン全域にわたって建設されました。詩人オルジャス・スレイメノフの詩的表現では、「カザフスタンは小さな世界地図の中の巨大な徒刑場となった。」のです。諸民族の強制移住は、このような歴史的背景の元で行われたものです。最初の強制移住の犠牲者は1937年の高麗人たちでした。人々は家畜運搬用の貨車に詰め込まれ、悲惨な状況で運ばれました。この後もポーランド人やドイツ人に続いてクルド人や北コーカサスの諸民族が送り込まれ、その中にワイナハの人々 すなわちチェチェン人やイングーシ人が含まれていたのです。

### ワイナハの人々と

この強制移住に関して、私は1997年にチェチェン共和国(イチケリア)のマスハドフ大統領が、カザフスタンでの暮らしを良く記憶する素晴らしい詩人ダガーエフを伴って我が国を訪れたときのことを、今でも印象深く覚えています。ダガーエフはホーマーのような盲目の詩人ですが、同時にイチケリアの英雄でもありました。彼らは訪問に当って、チェチェン人たちの、強制移住の最も困難な時にカザフ人が彼らに与えた支援について、カザフスタンとカザフ人に対する感謝の気持ちを表明しました。彼らはカザフ人が最後に残った一切れのパンを分け

与えてくれたこと、彼らに対し寛容に接してくれたことを語りました。私が思うにカザフ人は、大飢饉の時期に、母親が生き延びるために、幾人かいる子の何人かを犠牲にしなくてはならないような悲惨を経験したため、迫害されたり流刑となった人びとの苦しみや痛みを共に感じる我が民族の特質である同情心を膨らませ、養っていたのです。

1997年は私の父である作家のムフタル・アウエーゾフの生誕100周年の年でした。ユネスコの顕彰決議に基づいて、ユネスコ本部のあるパリをはじめ、トルコなど様々な国で記念式典が催されました。私は自分の父親の生誕百年を様々な国が祝ってくれたことは誇らしくもあり、うれしいことでしたが、最も感動したのは、チェチェン共和国（イチケリア）の首都、グローズヌイの廃墟の中で挙行された式典でした。チェチェン人、イングーシ人たちは、この式典に強制移住のつらい時代にカザフ人から受けた助けに対する自分たちの感謝の気持ちを発露する場を見出したのです。

#### 抑圧を共に生き抜いて

強制移住させられた人々は、全く想像もしなかったような異郷の地へ送り込まれました。極東の沿海地方に暮らしてきた高麗人にとって、カザフスタンの荒野（ステップ）は、想像に絶する土地だったはずですが、しかし彼らは、その稀に見る勤勉さと、卓越した農業技術により困難を克服し、自分たちの集団農場を建設して、我が国の経済建設に貢献し、水稻栽培やネギ栽培など様々な農業技術を多くの人々に伝えて感謝されました。確かに巨大な帝国の抑圧は厳しいものでしたが、その中でも抑圧された諸民族は互いに手を結びあい、助け合って生き延びたのです。

皆さんはご存知でしょうか？17世紀に朝鮮で出版された非常に珍しい百科事典が、この図書館に収められているのです。非常に多数の巻から成り立つものですが、我われが保有するのは最も巻の揃ったものです。これらの書籍はもともと、極東の朝鮮師範大学の収集品でした。数奇な運命を辿って朝鮮半島から沿海地方に持ち出されたのでしょう。1937年に朝鮮師範大学も高麗人たちと共に、カザフスタンのクズイルオルダに強制移住させられました。そして1938年に朝鮮師範大学の閉鎖が決まると、NKVD(内務人民委員部)すなわち後のKGB(国家保安委員会)の命令で、漢字や朝鮮語で記述された書籍は全て焚書されることになりました。訳のわからないものは全部燃やしてしまうというやり口でした。ところが、二人の人間がこの百科事典を救ったのです。一人は高麗人のこの大学の教師で、もう1人は書籍の焼却を担当させられたカザフ人の特務機関員でしたが、彼にも教養はあり、その価値については想像が付きまして。それで彼らは何とか百科事典を救おうと、木箱に百科事典を詰め込み、研究機関のあったアルマアタに誰が差出人かを書かずに送り出したのです。こうしてその百科事典がこの図書館

に納められることになったのです。カザフ人と高麗人が力を合わせて、人類の智慧を守ろうとしたのですが、彼らの行いは当時の状況では、命を賭けての行いでした。

強制移住させられた人々は、非常に厳しく管理され、決められた居住地からも移動を厳しく制限され、違反すると重労働 25 年の刑に処せられるという恐ろしいものでした。でもその厳しい圧迫にも人々は耐え、崇高な人間性を失うことが無かったばかりでなく、様々な民族が団結し、助け合うことを学びあったのです。

高麗人について言えば、ここカザフスタンだけでなくキルギス、ウズベキスタンやその他の地域でも同じですが、非常に多くの人々が高等教育を修め、作家、映画監督、様々な分野の学者、法律家、経済専門家などを輩出して、我が国の知的分野の向上に大いに貢献しています。彼らの朝鮮劇場も、素晴らしい芸術性を誇っています。こんな迫害を受けた人々がたんに肉体的に生き延びたと言うだけでなく精神文化の側面でこれほどの高揚を見せたと言うことは驚嘆に値すると思います。高麗人について言えば、その出自は民族の大部分が暮らす朝鮮半島であり、強制移住という仕打ちを受けたのは沿海地方に居住していた人たちだけです。

#### 強制移住と民族文化のサバイバル

しかし、一つの民族が丸ごと強制移住を被るとするのは、例えばワイナハ - チェチェン人、イングーシ人の場合は、また別の問題をはらんでいます。私は現在のイチケリア - チェチェン共和国が、チェチェン戦争が絶望的な状況になっても闘うのを止めないのを見ると、如何に彼らの記憶の中に深く、このカザフスタンにおける強制移住の記憶が刻み込まれているかと言うことを考えれば説明がつくでしょう。民族が丸ごと移住させられたと言う例は、私の知る限りでは二つで、一つは、ワイナハの人々、もう一つはカルムイク人です。カラチャイ人やバルカル人の場合は、部分的で丸ごとではなかったかと思います。

カルムイク人については、運命は非常に残酷なものでありました。彼らは一まとめになって集団で居住すると言うことを許されず、中央シベリアから西シベリアのロシア人の暮らす村へほんの 1-2 家族ずつ割り振られてしまったのです。その結果、大部分のカルムイク人が自分たちの言語を、英雄叙事詩を、伝統文化を忘れさせられてしまったのです。ですから、現在カルムイク共和国では、イルムジノフ大統領がカルムイク語の再興、ラマイズム(チベット仏教)の復活など、懸命に努力していますが、伝統民族文化を保護すると言うより、一旦忘れ去られ、無くなってしまったものを再現すると言うような観念的な作業となっています。私はイルムジノフ大統領らの試みが成功し、民族の文化が復興することを心から願っていますが、それが非常に複雑で困難なものだと言うこと

も理解しています。

このような民族の文化的な帰属意識の消失という悲劇は、ワйнаハの人々の間には起こりませんでした。彼らが送られてきたのが、自らも迫害の犠牲者であり、高麗人、ポーランド人、ドイツ人など様々な人々を受け入れ、異文化の持ち主に非常に寛容であったカザフ人の間に送られてきたからです。われわれの間では相互理解が可能であったのです。いわば「不幸を共有する兄弟」といった感情で我われは結ばれているのです。チェチェン人は、カザフスタンの地においても自分たちの慣習法や、伝統文化、19世紀に英雄的に抵抗したイマム・シャミーリの記憶や伝承を守り抜きました。その経験が、現在のコーカサスにおける祖国イチケリアの独立を守り抜こうとする英雄的な戦いの巨大なエネルギーとなっているのです。

色々な民族がカザフスタンで苦しい時代を我われと共にしました。その経験は、高麗人、ポーランド人、ドイツ人、ギリシャ人とそれぞれ、民族的な特性によって、実にまちまちですが、我われは、彼らのその後の運命、現在の状況にも無関心ではいられないのです。このような我われの感情が、チェチェン共和国イチケリアの英雄的な戦いへの共感となっているのですが、それを文学の世界で見事に表現したのが詩人のラファエリ・ニアズベーク（ニアズベーク）の詩篇です。彼のカザフ語の詩篇は、ロシア語に訳され、イチケリアの戦士たちは、それらの詩に勇気づけられ、その本を胸にしまってあるいはポケットに携えて、戦いに出かけたのです。私がマスハードフ大統領に会ったとき、そのニアズベークの詩篇を手にしたマスハードフは、イチケリアに文学賞が制定されたら、まずはニアズベークを顕彰したいと語っていました。後にそれがたんなる口約束ではなかったことが証明されました。ニアズベークには、彼の文学を称え、チェチェン人とカザフ人の連帯の証として、外国人で初めての最高勲章（キュイマン・シー＝民族の誉れ）が贈られたのです。世界中でチェチェンの戦いについては、数多くのジャーナリストが書いていますが、詩という文学的な表現で支援を行い、詩篇「イチケリア」が出版されたと言う例は他にありませんでした。私はニアズベークがまさにカザフ人であるから、こういうことが出来たのだと思っています。

話が変わりますが高麗人知識人たちの現代カザフスタンへの貢献と言うものは、丁度彼らが農業の分野で、水稻栽培やネギ栽培に発揮したような、とてつもない勤勉さによって特徴づけられます。非常に多くの経済、法律専門家、高等教育機関の教師たちが、高麗人で占められ、高麗人知識人は我が国の知的世界の切っても切れない有機的な部分をなしています。

彼らの特徴は、その精神の背景に東洋的な思想が脈々と流れていることです。私はそのことを彼らの書いた文学作品を読むと、それを感じるのです。ここにいるラウレンティー・ソンの書く素晴らしい散文もそうした作品にあたります。詩についても、彼らはそれを高麗語よりもロシア語で書くことが多いのですが、非常に若くて、自分たちの極東の故郷と全く縁の無い詩人たちの作品にも、東洋の薫りが漂い、如何に彼らが、受け継いできた伝統の重みを感じさせてくれます。また若い世代の高麗人たちが、近年、韓国語を大変熱心に習得しようとしています。このことは彼らの自文化理解に大いに役立つと思います。

我われが意を強くしているのは、我われ自身が今、カザフ文化の再興に向かって行おうとしている努力と高麗人の若者たちが行おうとしていることが、軌を一にしているからです。我われはカザフ語の強化を目指し、かつては否定的な見方をされてきたカザフの歴史や文化に眼を向け直しています。これらの動きは相互に刺激しあって発展するのです。

最後に私は個人的に日本の二つの時代に関心を寄せているということをお話したい。一つは明治維新の時代で、もう一つは第2次世界大戦後の戦後復興の時代です。1868年の明治維新は、日本の近代化を実現しました。日本は他のアジア諸国に先駆けてブルジョワ革命により、近代国家への移行を成功させました。その成功の鍵となった理論、哲学、実際のやり方全てが限りなく興味深いのです。我われは日本の専門家も招いてセミナーが出来ぬものかと考えております。第2次大戦後の日本は、ドラマチックな敗戦と、全般的な価値観、既存の世界観の崩壊を伴いました。それは個人のレベルから社会、国家にいたるまで全般的なものでした。このような大変動は、ポスト・ソビエト(ソビエト期以後)のカザフスタンも含まれるユーラシア社会における変動と比較することは、我われの未来にパラダイム形成にとって非常に重要だと考えます。

我が国は過去の歴史の中で、流刑、粛清、強制移住などさまざまな行きがかりで、実に多種多様な民族や集団を迎え入れてきました。若い独立国家の中でこれらの人々の潜在的なエネルギーを目に見える形に発揮させることこそが我が国の明日に向かう鍵なのです。